

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520928

研究課題名(和文) 多文化社会のケア・ジェンダー・エスニシティ：パキスタン系イギリス女性の事例から

研究課題名(英文) Care, Gender and Ethnicity in Multicultural Societies: The Case of British Women with Pakistani Background

研究代表者

工藤 正子 (KUDO, Masako)

京都女子大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：80447458

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イギリスのパキスタン系2世の女性への聞き取りと参与観察の結果をもとに、多文化社会のケア(とくに高齢者介護)にみられるジェンダーとエスニシティの相互作用、およびそれが社会の多元化に与える影響を明らかにすることを目的とした。調査からは、ケアをめぐる意識と実践に変容と継続の双方がみられ、女性たちが公的支援や有償ケアを親族内での無償のケアと組み合わせつつ、新たなケア実践を構築しつつあることが明らかとなった。そのプロセスで、エスニック集団間の境界が強化される一面もあるが、一方で女性たちは非親族や移民社会外での資源や関係性を動員し、それにより、多文化社会内の新たな社会関係の動態が生まれている。

研究成果の概要(英文)：The study explores how ethnicity and gender intersect in the practices of elderly care in multicultural contexts by examining the Pakistani community in the UK. The research reveals that there is change and continuity in their perceptions and practices of caring for the elderly. The women tend to consider their caring role as primary. At the same time, because of the increase in the number of women participating in the labor market, support from statutory services as well as paid care and unpaid care are becoming an indispensable part of family care. As a result, a new pattern of care is emerging, indicating a complex interplay between gender, ethnicity and class. While ethnic boundaries can be maintained or strengthened in such processes, the women also mobilize their resources and services outside their kin group and their ethnic community in performing their caring roles, which creates a new dynamic of social relationships between ethnic groups within multicultural society.

研究分野：文化人類学

キーワード：ケア ジェンダー エスニシティ 高齢者介護 パキスタン イギリス ムスリム 多文化社会

## 1. 研究開始当初の背景

先進諸国の少子高齢化が進行し、高齢者や子どもの世話をする移住ケア労働者に関心が集まっている。しかし、その一方で、移住労働者自身の家族のケアや世代の再生産をめぐる課題は等閑視されてきた。日本においても、すでに世代が進んでいる朝鮮半島出身者を中心とするオールドカマーと呼ばれる人々にくわえ、1980年代以降に来日し、定着したニューカマー外国人も近い将来に高齢期を迎える。こうした状況のなかで、移民の高齢化が社会にもたらすインパクトや、そのケアの実践の現状と課題を明らかにすることは喫緊の課題であるといえる。本研究はこうした問題意識のもとで、移民1世の高齢化が進行しつつあるイギリスのパキスタン系移民社会を対象に、以下のような目的のもとで調査を行うことを企図した。

## 2. 研究の目的

本研究は次の二つを主な目的として始められた。

第一に、イギリスのパキスタン系社会の移民2世の女性が担うケア役割に焦点をあて、誰がどのようにケアしているのかをめぐる実践と規範を明らかにし、そのダイナミズムが、ジェンダーやエスニシティ、および彼女たちを取り巻く社会経済的諸条件といかに相互に作用するのかを考察する。

第二に、そうした移民社会のケアのあり方が、社会の多文化化にいかに影響しているのかに目を向ける。移民社会の世代が進むなかで、子どもや高齢者をケアすることの実践をとおして、エスニック集団間の関係がいかに変化し、その境界がいかに維持、または再構成されるのかを明らかにしようと試みる。

## 3. 研究の方法

本研究は、パキスタン系イギリス女性(主に移民2世)を主な対象とした聞き取り調査と参与観察にもとづく実証研究である。3年の研究期間中、毎年各3-4週間の期間、バーミンガム市において現地調査を行った。聞き取りは半構造的な方法を用い、主に(1)家庭内のケア役割の実践や意識、(2)家外での有償のケア労働の経験、(3)公的または民間のケア・サービス利用の実態とそれに関する意識等について聞き取りを行った。

得られたデータには子どもや障害をもつ家族に対するケアも含まれたが、高齢化しつつある親(移民1世)のケアが課題となりつつあるケースが多かったため、高齢者介護についての聞き取りデータが中心を占めた。(後述するように、高齢者用のケア施設等での調査も行ったのはこのためである。)個別の聞き取りの対象者は以下のとおりである。

女性13名、男性2名(30代~50代で、家族やエスニック・コミュニティ内のケアの状況について聞き取りを行った)。女性対象者のうち、6名には3年

間の研究期間中、毎年調査を行い(計18回)、2名に2回(計4回)の聞き取りをすることで通時的変化も明らかにすることができた。

高齢者(施設の利用者含む)男性3名、女性4名。

市役所職員2名(ともに男性)、医師1名(女性)[エスニック・コミュニティ内のケアについて]

以上の対象者は主にパキスタン系移民であったが、施設職員については、パキスタン系以外の南アジア系移民(インド、バングラデシュ系など)も含んでいる。

さらに、南アジア系移民の高齢者や介護者(ケアラー)を対象とする高齢者用集合住宅(「シェルタード・ハウジング[sheltered housing]」)1ヶ所(民間)、デイケア・サービス4ヶ所(市営1ヶ所、NGO運営1ヶ所、民間2ヶ所)、NGO主催の高齢者および介護者支援のための会2ヶ所を訪ね、参与観察を行った。上記施設のうち4ヶ所については、研究期間中、複数回訪れた。これらの施設や会では、運営者や施設職員(男性7名、女性9名)にも話を聞いた。

このほか、文献調査および国内外の関連分野の研究者との意見交換を行いつつ、収集データの分析を進めた。

## 4. 研究成果

### (1) バーミンガム市のパキスタン系移民：移住プロセスと社会経済的地位

イギリスでは、第二次世界大戦後の旧植民地からの労働移動や家族の合流にくわえ、その後のEU域内からの移動や、難民受け入れなどがあり、複雑なかたちで社会の多元化が進んできた。パキスタン系移民については、1950年代~60年代にパキスタンから旧宗主国イギリスの産業都市に向かう単身男性の労働移民の波がみられ、主な調査地としたバーミンガムはそうした都市のひとつであった。その後、妻子が合流し、イギリスで成長した2世の多くは現在30~50代の年齢にある。2011年の国勢調査によれば、パキスタン系人口は、イングランドとウェールズの総人口の2%(約112万5千人)を占め、バーミンガム市では、市人口(約107万3千人)の13.5%(約14万5千人)に達する。

パキスタン系の社会経済的地位については、インド系や他のエスニック・マイノリティ集団や主流社会と比べ教育レベルや職業階層が低い。また、女性の就業率が低いこともパキスタン系の平均世帯収入の低さの一要因として指摘されてきた。一方で、2世の一部では大学進学率が上昇し、移民社会内での社会経済的地位の分極化が進んでいる。また、後述するように、女性の就業率も母親世代と比べれば高くなっている。

パキスタン系移民は、圧倒的大多数がイスラーム教徒(以下、「ムスリム」)であることから、とくに2000年代に生じた一連のテロ

事件後に、イギリス社会の「内なる他者」として表象される傾向が強まった。しかし、世代やジェンダー、階層、宗教意識、1世の出身地の違いによるエスニシティなどの多様な差異があり、「パキスタン系」といっても、そのアイデンティティの様態は重層的かつ多様である。

## (2) パキスタン系1世の高齢化

### 老いの経験における格差や差異：エスニシティとジェンダー

イギリスのパキスタン系移民社会では、現在1世が高齢期を迎えつつあり、介護が課題となりつつある。1世は、移住初期は一時的な出稼ぎという意識が強かったが、家族が合流したのちにはイギリスへの定着の度合いが高まった。パキスタン系を含むマイノリティの高齢者を捉えるうえで注意すべきは、同じ高齢者でも、エスニック集団により健康状態に格差がある点である。とくに、ブルーカラーの労働者として長時間の肉体労働を重ねてきた移民の健康状態は、概して主流社会に比べて悪いといわれている。くわえて、労働中心の生活を送った者が多いため、退職後の社会的ネットワークが狭いなど、生活の質という点でも格差があることが指摘されている(Blakemore and Boneham 1994)。

老いの経験にはジェンダー格差もみられる。例えば、同じパキスタン系1世でも女性は、車の運転をしないことから移動の手段が限られていたり、家外で働いた経験が少ないために英語能力が低いなど、公的支援へのアクセスの点で、不利益や格差が生じている。つまり、多文化社会における高齢者の状況は、エスニシティやジェンダー等による差異を考慮したうえで立体的に捉える必要がある。

### マイノリティ高齢者や介護者(ケアラー)への公的支援

こうした問題を抱えるエスニック・マイノリティの高齢者への公的な介護支援については、以下のような課題がある。

第一に、「マイノリティは、(文化規範によって)高齢者や障害者を家族内で世話する傾向が強い」とするステレオタイプが主流社会や行政の側に形成されていることから、公的サービスの対象としてマイノリティ高齢者に十分な注意が向けられてこなかった(Mand 2008 など)。しかし、マイノリティの高齢者にも、子がいない夫婦や独身者、子がいても依存できないなどのケースがあり、規範的な家族だけでない、多様な家族形態が存在する。さらに、近年では、産業構造の変容やグローバル化等により、子が親の居住地とは異なる地域や国で働くケースがふえていることから、マイノリティ高齢者に対する公的支援の重要性は高まっている。

第二に、マイノリティの高齢者に対しては、言語の壁があることから公的支援が十分に周知されていないという問題がある。また、

主流社会における被差別経験から、介護者も含めてマイノリティから公的サービスへの信頼度が低いことも、既存の公的支援を十分に活用することを困難にしている。

### 文化的に配慮したサービス

マイノリティ高齢者への公的支援の課題としてはさらに、言語、文化、宗教等の面で個別のニーズへの対応が求められることがある。例えば、南アジア系を対象とするデイケア施設で会ったムスリム男性の利用者は、以前は、一般のデイケア施設を利用していたが、利用者の中心が白人やアフロカリブ系の高齢者であったため、話しかけてくれる人も少なく、孤立しがちであり、さらには、ムスリムとしてのハラール食(イスラーム法的に合法的とされる食)が供されないことも問題であったという(工藤 2014)。

バーミンガム市において、南アジア系集団のニーズに配慮したサービスは、エスニック・マイノリティ自らのイニシアティブで始まったようである。調査で訪れたデイケア施設の多くが1990年代に始まっており、その一つのNGO団体(移民支援活動)によれば、1980年代初頭までは、移民から寄せられる相談は在留資格や納税に関するものが殆どであったのに対して、1世の高齢化にともない、年金受給や住居問題について相談が寄せられるようになった。同団体はいち早くそうしたニーズを把握し、南アジア系高齢者向けの集合住宅(「シェルタード・ハウジング」)の運営を開始したという(工藤 2014)。

政策上でもこのような文化的に配慮したサービス提供の課題が1990年代をつうじて認識されるようになった(Vernon 2002)。しかし、そうしたサービスに問題がないわけではない。例えば、そうしたサービスではマイノリティの言語が話せる職員が雇用されるが、マイノリティ出身であれば同じ文化的背景をもつ高齢者をケアできるものとみなされ、介護職としての訓練を受ける機会を十分に与えられない場合がある。また、そうしたマイノリティの職員の労働条件が有期雇用で不安定なものであることが多いことも問題である。

## (3) パキスタン社会におけるケア：誰がどのように介護するのか?

1990年の「国民保健サービス[NHS]およびコミュニティ・ケア法(National Health Service and Community Care Act)」などをへてイギリスでは、高齢者や障害者のケア政策を、施設介護から利用者の自律性や選択を重視する居宅介護へとシフトさせてきた。それにともない、家族を主な担い手とする無償のケアが重要な位置を占めるようになると同時に、ケアの市場化が生じている。こうしたなかで、パキスタン系社会においては、家族内やコミュニティにおいて、誰がいかにケアをするのが課題となりつつある。

パキスタンの社会では基本的に女性が結婚をして家を建て、残った男兄弟とその家族を核に形成される父系合同家族が家族の理想型とされている。イギリスでは、住宅事情などからこうした合同家族が一つの家に同居することは少ないが、近隣に居住し、相互に扶助することが理想とされている。親族関係は、世帯間の訪問や経済支援、モノ、サービスなどのやりとりにより維持され、とくに、老親の世話は文化的、宗教的に子の義務として重要な意味を付与されている。

では、実際に誰に親をケアする責任があるとされるのだろうか。聞き取りでは、主な責任は息子、とくに長男とその嫁にあると答えたケースが主流であったが、一方で、親の家にもっとも長く住むことになる年少の息子に責任があるとする意見もあれば、実際には複数の息子の家で数ヶ月ごとに順番にみているというケースもあった。

さらに着目すべきは、家族にとって、息子の家族が親を世話することが、移民社会内での名誉や体面に結びつくという認識である。例えば、ある女性は、夫の母親について、本当は実の娘のほうが気兼ねなくみてもらえるが、義母にとっては、娘の家で世話されることは、「文化的に受け入れがたい」ことだったと述べている。

パキスタン系移民にとって「親のケア」は文化的に規定された広範囲の行為を指す。例えば、老いた親の身体的介助や扶養のみならず、親の家を訪問すること、そして、親がパキスタンの親族を訪ねたり、ムスリムとしてマッカ巡礼を行う費用を負担するといった行為も重要な「親のケア」として語られる。

くわえて、親が移民1世であるがゆえに必要なとされるケアもある。例えば、1世は、通院や介護の公的支援を利用するうえで、英語力や主流社会の制度に関する知識が不十分であるために子に依存することが多い。これに対して、自分たちはそうした点では3世に頼る必要はないだろうとする2世も複数おり、求められるケアの内容も世代によって変化することが推測される。

このように、今後の変化が予見される一方で、親をケアする時期に入った2世らの聞き取りでは、親を施設に入れることの抵抗感やタブーを語るケースが多かった。注意すべきは、その際に、主流社会の白人（「イングリッシュ」）に対して「我々パキスタン系（または南アジア系）は、親を施設にいれるようなことはしない」といった語りがよく見られたことである。このように、ケアのあり方を語るなかで、「我々/他者」の境界線が意識され、補強される。パキスタン系移民社会では、女性の性的な慎み深さや振るまいをとおして、主流社会との差異が強調される傾向が強いが、1世が高齢期を迎えるなかで、老いた親の介護もまた、主流社会に対して「我々」を定義するうえで重要な位置を占め

ている。

#### (4) ケア役割をめぐる変化と継続

上述のように、理念や規範のレベルでは、親のケアを重要な役割とする傾向が強くみられた。一方で、以下に示すように、その実践は変化しつつある。

##### 女性の就労とケア役割の分業

既述のように、結婚して家を建てた女性たちは実の親の世話は期待されないが、夫の親を世話することを期待される。このことは、パキスタン社会では、夫に経済的な扶養義務があるのに対して、妻に家事や育児、介護などの役割が課され、そうした役割の遂行が女性らしさの理想とも密接に結びついていることと関連する。

家庭内のケア役割を、ムスリム、または南アジア系女性としての自らの最も重要な役割として位置づける考え方は、1世のみならず、2世の既婚女性の多くにもみられる（工藤 2011）。しかし、本研究からは、パキスタン系2世の女性のケアをめぐる意識や実践が、1世の母親たちと比べて次のような点で変化していることがみえてきた。

第一に、家族をケアする役割を重視する考え方には大きな変化が見られない一方で、女性の就労の増加により、高齢者ケアは実際には困難になりつつある。その背景には、2世の教育レベルが向上したことにくわえ、イギリス、とりわけ産業都市であったバーミンガム市の産業構造が変容し、製造業で働いていたパキスタン系男性の多くが失業したり、雇用が不安定化したことがある。さらに、子の教育費の高騰などを背景に、パキスタン系移民社会においても、「労働の女性化」が生じている（工藤 2014 : 90-91）。

ただし、女性の就労が夫婦間でのケア役割の分かち合いに直結するわけではない。むしろ、妻が就労した場合には、同居、または近隣に居住する親族女性から支援を受けるケースが少なくない。このように、女性の就労が夫婦間の家事や育児、介護の分担につながるというよりも、親族女性の間での分業や依存関係がみられる。

##### 家族や結婚をめぐる変化とケア役割

移民社会における結婚や家族形態の変容もまた、ケア実践の変容をもたらしている。パキスタン移民社会では結婚は依然として重要な規範であるが、独身女性や離婚した女性も増加している。こうしたなかで、ある女性は、離婚後両親と同居し、病気の親を介護した経験を語った。彼女は、「南アジア系コミュニティでは親をみる責任は男性にあるといわれる。でも、実際には嫁が世話しているし、女性たちは実の親の世話も結局やっている。まわりの友人をみても、男兄弟が親の世話をしているわけではなく、娘の肩にかかっているのよ」と述べ、介護をめぐる理念と実践に齟齬があることを示唆した（工藤 2014）。

### 女性間のケアの階層化

上記のような変化のなかで、移民社会内の女性間のケアの分業がみられる。第一には、既に述べたように〔(4)の 参照〕親族内の世代の異なる女性のあいだのケアの分業がみられる。第二に、ケアの市場化にともない、裕福な女性のあいだではケアの外部化が進行している。ある2世の女性(専門職)は、「この国には東欧などからの移民が安い賃金で家事も提供するため、そうした仕事はお金を払ってやってもらっている」と述べた。

第三に、パキスタン系の2世や結婚移民の女性の間では、南アジア系高齢者を対象とする介護施設で働く女性がふえている。パキスタン系女性の就労職種は、初等教育の教師など女性化された領域が多くみられるが(工藤2011)、近年、介護分野で働く女性もふえている。その背景の一つには、主流社会のみならず、南アジア系人口も高齢化するなかで、南アジア系の高齢者を介護するために、文化的、言語的な知識をもつ職員が求められていることがある。デイケア施設で働くある女性は、以前は工場で働いていたが、工場が閉鎖となり、南アジア系の言語資源が利用できるケアの仕事に移ったと述べた。この例が示すように、産業の中心が製造からサービス分野へとシフトするなかで、ケア分野で働く女性がふえている。

しかし、こうした介護労働は安価で柔軟な労働であることが多く、さらに、既述のように南アジア系に特化したケア・サービスの多くは、公的資金が削減されれば職を失うことになるため、不安定な雇用であることが多い。以上のように、移民社会において、ケアを外部化する女性と、有償ケアを提供する女性の双方が出現し、階層の異なる女性のあいだでケアの分業や階層化が生じている。

### 公的サービスの利用をととした新たな関係形成

マイノリティ高齢者が国家の公的支援を受けらうえでは、さまざまな課題があることは、既に述べたとおりである〔(2)の 参照〕。一方で、公的支援がパキスタン系の既婚女性の就労を可能にし、また、高齢者にある程度自律した生活を送ることを可能にしていることも確かである。公的支援の存在は1世が老後を故国ではなく、イギリスですごす主な理由の一つともなっている。

パキスタン系高齢者が高齢者用の集合住宅に住むケースは少なく、また、子の世代でも、それに対する文化的な抵抗感も根強くみられるが、親を日帰りのデイケア・サービスに託すことは珍しくない。その背景には、親のケアをめぐる意識の変容が考えられるだけでなく、イギリスで生まれ、公教育を受けた2世にとっては、公的サービスのアクセスが親の世代よりも容易にできることもあるだろう。こうしたデイサービスの利用は、2世、特に働く女性たちが、文化的規範の枠内

に留まりつつ、老親との関係を新たに構築していることを象徴的に示しているのではないだろうか。

また、親が年金を受給していることも、離婚女性や独身女性が親を長期的に世話することを可能にしているといえる。介護者給付金などの制度については、それが文化的に定義された女性のケア役割を強化しているという指摘もあり(Gardner 2002)、制度が女性のケア役割に与える影響は単純ではない。制度とケアをめぐる意識や実践との複雑な相互作用について、今後の政策の変容とともに注視していく必要がある。

このほかの変化として、2世が親の介護で問題を抱えた際に、親族ではなく、エスニック集団内の非親族の助けを受けたり、また、私的な問題を解決するために、主流社会の「イングリッシュ」を含め、他のエスニック集団の友人や知人からの支援を受けた例もみられたことも付記しておきたい。この背景には、2世の女性たちが、主流社会から差別や排除を経験しつつも、教育や就労を通じて、パキスタン系コミュニティ外での一定の関係を形成していることがあるだろう。また、「パキスタン系」として自己を定義する1世に比べ、「ブリティッシュ(“British”)」、あるいは「ブリティッシュ・ムスリム」として自己を定義することが多い2世の女性たちの自己意識のもちようもそこに関わっているといえる。

### (5) 総括

以上の調査結果から、次のような点が指摘できる。

第一に、マイノリティ高齢者およびその介護者の支援については、エスニシティ、ジェンダー、階層の違いなどから生じる格差を考慮することにくわえ、宗教や文化的な背景を配慮した個別のニーズに対応することが求められる。しかし、同時に、そうした対応が、マイノリティの高齢者や介護者および介護労働者の本質化や排除、周縁化につながらないように配慮していくことが必要である。

第二に、移民2世は、親の介護を文化的、宗教的に重要なものとして位置づけ、それによって、重層的な自己のアイデンティティのなかの「ムスリム」や「パキスタン系」または「南アジア系」としての要素を確認し、主流社会と自己を差異化する傾向がある。つまり、老親の介護をめぐる語りをとおして、エスニシティの境界が維持、補強されているといえるだろう。

その一方で、実践レベルでは、女性たちのケアをめぐる実践と意識は、社会経済的な諸条件や、移民社会の家族や結婚パターンの変化と絡み合いつつ変容している。親を高齢者用集合住宅などでの介護に託すことについては2世の間でも依然として強い抵抗感があるが、デイケア・サービスなどの利用は始ま

っている。また、ケアを望ましい女性性と結びつけるジェンダー理念に大きな変化はないが、有償ケアの利用者またはその担い手となる女性もふえており、移民社会内の女性のあいだでケアの分業や階層化がみられる。

このように、パキスタン系社会において、介護をめぐる言説と実践をつうじて家族の親密な関係が再生産され、その一方で、今後女性たちが、親族内および移民社会内の支援ネットワークにくわえ、公的支援や商品化されたケアを組み合わせて、どのようなケアの混合(ケア・ミックス)を生成していくかが注目される。そのプロセスは、自らを何者とみなすかというアイデンティティの問題とも不可分に結びついている。つまり、女性たちのケアをめぐる意識や実践の変容は、ローカルおよびグローバルな社会経済的な構造変容と絡み合いつつ、多文化化が深化するイギリス社会で女性たちが、「パキスタン系」、「ムスリム」そして「ブリティッシュ」等としての自己の重層的な位置どりを交渉する複雑なプロセスの一部として理解することができる。

以上の報告は、社会の高齢化が、多文化化と交差し、さらに、関連する諸政策や産業構造の変容、労働の女性化や格差などが作用して、複雑な様相を呈していることを示すものである。今後、各国の個別の文脈に即した状況を明らかにし、さまざまなアクターによって担われるケアを通じて、家族、地域、国家、そしてそれを超えたネットワークという異なるレベルで人々のつながり合いがいかん生成、または再編され、そこにいかなる諸要因や力関係が関与していくのかを照射していくことが求められている。

#### <引用文献>

工藤 正子、2011、「移民女性の働き方に見るジェンダーとエスニシティ パキスタン系イギリス女性のコミュニティ・ワークを中心に」、竹沢尚一郎(編)『移民のヨーロッパ 国際比較の視点から』、明石書店、pp.172-197。

工藤 正子、2014、「多文化社会のケア、エスニシティ、ジェンダー 英国パキスタン系移民の高齢者介護の事例から」、『現代社会研究』(京都女子大学現代社会学部紀要) (17)号, 2014, pp.81-94。

Blakemore, Ken and Margaret Boneham 1994, *Age, Race and Ethnicity: A Comparative approach*, Open University Press.

Gardner, Katy (2002) *Age, Narrative and Migration: The Life Course and Life Histories of Bengali Elders in London*, Berg.

Mand, Kanwal, 2008, "Who Cares? 'External,' 'Internal' and 'Mediator' Debates about South Asian Elders'

Needs," Ralph Grillo (ed.), *The Family in Question: Immigrant and Ethnic Minorities in Multicultural Europe*, Amsterdam U.P, pp.187-204.

Vernon, Ayesha, 2002, *User-defined Outcomes of Community Care for Asian Disabled People*, The Policy Press and Joseph Rowntree Foundation.

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

工藤 正子、「多文化社会のケア、エスニシティ、ジェンダー 英国パキスタン系移民の高齢者介護の事例から」『現代社会研究』(京都女子大学現代社会学部紀要)、査読なし、(17)号, 2014年、pp.81-94。

[学会発表](計3件)

工藤 正子、「パキスタン系移民社会における女性の身体と名誉 英国と日本の事例を中心に」、2015年3月31日、科研費基盤研究(B)「地中海から西・南アジア地域の人々に関わる“名誉に基づく暴力”の文化人類学的研究」研究会(京都大学人文科学研究所(京都))

KUDO, Masako "Negotiating Motherhood in Transnational Space: A Case of Japanese Women Married to Pakistani Labour migrants," 査読有、AAS-in-Asia Conference "Aisa in Motion: Heritage and Transformation", 2014年7月18日、シンガポール国立大学(NUS)(シンガポール)。

工藤 正子、「英国におけるパキスタン系コミュニティの変容 二世世代の女性たちによるエスニック境界の交渉に着目して」、2014年1月24日(招聘講演) 関西学院大学先端社会研究所、定期研究会(南アジア/インド班研究会第5回)(関西学院大学(兵庫県・神戸市))

[図書](計2件)

工藤 正子、晃洋書房、『現代社会を読み解く』2015年、霜田求ほか(編著)、全286頁(担当部分 pp.115-126。)

KUDO, Masako Cambridge Scholars Publishing, *The Age of Asian Migration: Continuity, Diversity, and Susceptibility, 2015*, Yuk Wah Chan et al. eds., 査読有、全418頁。担当部分 pp.46-59。

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

工藤 正子 (KUDO, Masako)  
京都女子大学・現代社会学部・准教授  
研究者番号: 80447458